



Title	時の永遠の連鎖 : チェーホフの創作と時間
Author(s)	高橋, 晶子
Citation	大阪大学言語文化学. 1994, 3, p. 65-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

時の永遠の連鎖

——チェーホフの創作と時間——*

高橋 晶子**

Anton Chekhov, the final member of the lineage of 19th century Russian fiction, chose the short story form rather than the more mainstream novel form in which to express his art. This genre had been thought a mere practice-ground for the novel, but with Chekhov it came to be appreciated anew. He did not attempt to use his characters to express weighty ideas, as was common in that day. Instead, the stress is on the flow of Time in which these characters exist.

Time is the real protagonist in the stories of Chekhov. Characters appear and disappear in the stories, rather than being born and dying, and because of this the stories continue on inexorably, giving us the feeling that Time will flow on eternally with new characters. He is not being judgemental in placing his weak and feckless human characters in contrast to the starkly eternal character of Time. Instead there is a sense of hopeful approval created by the strength and eternality of Time. His characters perceive eternal Time, an eternal chain, by using “memories,” both individual and collective, and thus position themselves in it. Once positioned, they just “go with the flow.” Human individuality balances perfectly with Time’s eternality. Characters coexist between limited lives and the stream of eternal Time. Numerous characters in Chekhov’s stories complete a chain of Russian Eternity.

*Going with the Eternal Flow in Chekhov (Akiko TAKAHASHI)

**言語文化研究科博士前期課程

A. П. チューホフ(1860-1904)は、19世紀ロシア文学の幕を引いたというに相応しい作家である。しかし彼は大作家たちによってうち建てられた19世紀ロシア文学の正嫡であると同時に、その創作の形式において異端であったともいえる。基本的にはこれは、彼が散文小説のジャンルにおいて、当時ロシア文壇で認められるための必須条件であると同時に作者の社会的・思想的立場が鋭く問われるものでもあった長篇小説(роман)よりもむしろ、短篇小説(рассказ)を選び、その芸術の媒体としたことに由来する。彼は初期のただ一篇¹⁾を除けば長いものであっても中篇(повесть)までしか書かなかった。その理由を作者の小説家としての限界に帰することも、またトルストイやドストエフスキー等が活躍した時代に比べて彼の時代、いわゆる「たそがれの時代」において一定の強い思想を持つことの困難さに帰することも可能であろう。しかし少なくとも、チューホフの芸術と短篇という表現形式が見事に調和しているということに疑問の余地はない。自己の芸術的本性と短篇という表現形式の関連性を、彼は生涯の創作活動を通じて模索し、そのことによってその芸術を確立していったと考えられる。彼は短篇という表現形式にいわば新風を吹き込み、長篇に対しての習作といった立場からより高いレベルへと引き上げたのであった。

ここでは彼の芸術が完成されつつあった後期作品を主に取り上げる。A. チュダコフは、後期作品の特徴として語りが一貫して三人称で行なわれるという点と、客観的描写の中に作者の主観を思わせる視点が物語中に自由に現れるという点を挙げている²⁾。後期作品の中の到る所でチューホフの声が出現するが、しかしそれは登場人物の姿を借りてではない。作者が「私」として登場する、例えばドストエフスキーの一部の作品とは異なっている。にもかかわらず、チューホフはいわばシェラザード姫のように語り手として一つ一つの作品の上に遍在する。個々の作品という枠を越えて、あたかも一つの連続した世界が形成され、そこに共通の時間が流れているかのようである。

チューホフの「時間」は単に物語の展開と構造を支えるだけのものではない。これについては「田舎町のクロノトポス」としてバフチンが多少触れてはいるが³⁾、この言及は構造面にとどまるのであって、時間の諸相に関わる多面的な議論

¹「狩場の悲劇」《Драма на охоте》(1884～85)

²Чудаков, А. П. *Поэтика Чехова*. Наука, М., 1971. 著者はチューホフの創作期間を初期(1880-1887)、中期(1888-1896)、後期(1897-1904)の三期に分け、それぞれの時期を固有の創作方法を持った発展段階と考える。

³Бахтин, М. М. *Формы времени и хронотопа в романе*, в кн. *Вопросы литературы и*

が十分に行なわれているとはとても言い難い。本稿においては、後期でも特に、構造および作品の内在世界の両方において時間が比較的正面から扱われている作品、『僧正 *Архипевъ*』（1902）を主に取り上げて、チューホフ文学における「時間」の意味を考察し、それが何らかのロシア的なものとの関連にあるかどうかについて検討する。

1 生活の時間・回想の時間・語りの時間

大きく分けてこの作品には僧正の実際生活の時間とその回想の時間の二つが交替を繰り返しながら流れているが、これら二つの時間はしばしば非常に流動的で区別しがたい。

いつか祈祷は、いっそう赤々と燃え上がる数々の思い出と入り混つたが、祈祷も母を思う邪魔にはならなかった。(10:188)⁴⁾

僧正はまた、自分が望郷の思いにかられたことや、盲目の女乞食が毎日窓の下で恋歌を歌い、ギターをつま弾いたことを思い出した。その歌声を聞く度になぜか過ぎ去った日々を思い出したものである。やがて8年の歳月が流れて彼はロシアへ呼び戻され、今ではもう大主教補になっている。一切の過去が、夢のようにどこか遠い遠い霧の中に消えてしまった……(10:193)

これらの部分では現在と過去が互いに場所を譲り合うように混在し、過去の断片は現在の断片となる。現在と過去の混在はまた、未来への飛翔をも容易にする。僧正が礼拝で合唱を聴きながら過去を生き生きと美しく回想する時、彼はふと思う。「あるいは我々は来世でもこの地上の生活のことをこれと同じ気持ちで思い起すのであろうか！」(10:195) 過去を思い起している「いま」は、来世から思い起されるべき「いま」に重なりあう。僧正の豊かな「いま」の意識のなかで、過去と未来は容易に行きつ戻りつする。

物語時間はしかし、整然と前へ前へと流れていく。僧正の体の不調はすでに冒頭で語られ、作者の導入する回顧的な視点によって読者は無意識のうちに物語の

эстетики. М., 1975. (北岡誠司訳『小説の時空間』新時代社, 1987年, 331-334頁)

⁴⁾以下作品引用は全て次のテキストによる。数字は(巻:ページ)。訳文は拙訳による。А. П. Чехов. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах, М., 1974 ~ 1983.

結末、即ち僧正の死を感じ取る。一方には時間軸を離れた、発端も終局もなく想像力が働く時間（主に「回想」として現れている）があり、他方には、主人公の最期、物語の終局へと動いて行く時間がある。時間表現は過剰なほどである。（表1、時間表現一覧参照）わずか15頁弱の作品に時間表現は30箇所以上に上る。作者は絶えず読者に「時間」を意識させ、同時に僧正自身もまた自らが一時的存在であることを強く意識し、時間の中に囚われている。

想像力は時間に囚われることはない。しかし、こと僧正の回想になると、それが整然と時間的秩序に従って書き分けられて行く。ほんの子供の頃、次に15才頃、それから神学校時代、そして32才の時に神学校長になったこと、病氣療養のため外国に転地したこと、8年の歳月が流れて——今はロシアにいる。現在と過去の間を飛び交い、時には未来に思いを寄せながらも、7つの断片から成る回想の世界もまた終局に向かって刻々と進んでいくのだ。

僧正の母とシソーイの会話で特に多用される「それから」《ПОТОМ》という言葉も、随所随所に現れて物語を終局へ促そうとする。時間的飛躍を可能にするこの語によってチェーホフは自在に時間を飛び越える。「一月後新しい僧正が任命され、僧正ビョートルのことは、もう誰一人思い出す者もなかった。それからすっかり忘れ去られた。」(10:201) 僧正の生存中とその死後は時間のテンポも変わってくる。もはや僧正は誰の思い出にも上らず、すっかり忘れ去られてしまう——それほどの時間の経過が結末のこの一文で語られる。

僧正の日常の背後にある物語設定の時間について次に考えてみたい。

物語は柳の日曜日（復活祭の一週間前の日曜日）前日の土曜日から復活祭までの一週間〈受難週間〉に時間を設定されている。復活祭前日に僧正が死ぬという符合は、僧正をキリストに準える批評を喚起しているが、ここでは時間の流れの面からこの設定を考え直すことにしたい。一日一日が独立の名称を持った一週間（ラザロの土曜日、柳の日曜日、聖大月曜日、聖大火曜日、聖大水曜日、聖大木曜日、聖大金曜日）⁵⁾は毎日が意識において等価となり、規則正しいリズムを刻みながら流れていく。この一年という時間単位におけるクライマックスと僧正の生のクライマックスとがちょうど連動する形になるのである。一貫して直線的に結末に向かって流れているように思えた時間は、僧正の死を迎えてもとどまることなく流れて、また同じ復活祭の日々へと戻ってくる。このように一年で最大の祭、

⁵⁾一週間全ての日が独立した名前を持つ週は他にはない。

復活祭前日の僧正の死は、僧正のキリストとのアナロジーよりも、いっそう直接的に、そして本質的に一人の人物の生命と円環的な永遠の流れとの交錯を示しているのである。

物語の結末＝テキストの〈終わり〉＝主人公の死となっている典型的な作品『イワン・イリッチの死』（トルストイ, 1884-6,）においては、語りは死の瞬間までイワンと共にあり、その死を語りきることによってテキストも終る。

『もう死はおしまいだ』と彼は自分に言い聞かした。『もう死はなくなったのだ。』彼は息を吸いこんだが、それも途中で消えて、ぐっと身を伸ばしたかと思うと、そのまま死んでしまった。⁶⁾

これに対して、『僧正』では、「今や鳥のように自由な彼はどこへでも歩いていけるのだ！」(10:200)という言葉を残して語りは僧正の傍を離れ、母親とシソーイの側に移る。僧正は死んで物語から姿を消すのではなく、忘却されて徐々に消えていく。彼はいわば「退場」する。この語りの移行は主人公亡き後にも変わらず流れる時間、作品を越えて流れる時間を示す。僧正が死ぬまでの一昼夜も過ぎ去り、死後僧正にまつわるあらゆることは忘却される。僧正の死後も人々の生活は続く。

2 時間の中の人間

2.1 連続と再生

『谷間 *В овраге*』(1900)について M・ゴーリキーは次のように述べる。

人生を見、我々の嘆きを見て、チーホフは初め、我々の日常生活の無秩序と混乱にとまどい、我々と共に唸り、ため息をついていたが、今やもっと高いところに立って自分の印象を総括し、巨大な反射鏡のように自らのなかに全ての光、全ての色彩を集中させ、全ての悪いものといいいものとを計りにかけている。⁷⁾

⁶ *Смерть Ивана Ильича* — Толстой Л. Н. Собрание сочинений в 22-х т. М., Худож. лит., 1978, т.12, стр.107.

⁷ Горький, М. *Литературные заметки. По поводу нового рассказа А. П. Чезова «В овраге»*. — «Нижегородский листок» 1900, No.29, 30 января.

高い視線の下ですべてのものは等しく相対化され、軽小化する。人物の肩から思想の重荷が下ろされ、時の中で一人一人が自らの生を生きる。

僧正は小説の意識のダイナミズムの中核を成すが、彼の主観的な視点の出現前に短い導入部が置かれる。これは僧正の知覚の主観的性質を強調し、終局部の僧正の死後のエピソード部分と呼応することによって、僧正の生が時間のたゆまぬ流れの中にあることを印象付ける。

その冒頭部分——「と突然、夢を見ているのか、それとも熱に浮かされているのか、僧正は丸9年会わなかった実の母親のマリヤ・チモフェーエヴナが群衆に混じって自分に近づいて来るような気がした。」(10:186)母親の実在と僧正の記憶双方が弱く曖昧である。この頼りなさは、ちょうど僧正の死後のエピソード——何年か後僧正の母が自分に僧正になった息子がいたことを話す時に、信じてもらえないのではないかとおどおどしながら話し（これは彼女自身さえも信じる力を失いつつあることを示している）、「そして事実、彼女の話信じる者はほとんどいなかった。」(10:201)——と呼応している。冒頭と終局で、記憶はその儚さ、頼りなさによって時間の中で人間の無力さを示す。対比的に時間の冷厳さと絶対的な大きさが強く暗示されるのである。物語の発端から一週間経過し、すでに僧正が亡くなった後、滞りなく楽しく陽気な復活祭が行なわれる。

明くる日は復活祭だった。町には42の教会と6つの僧院があった。大きな嬉しげな鐘の音が、春の大気を揺すぶりながら朝から晩まで町の上に轟いていた。鳥がさえずり、太陽が明るく照っていた。…(中略)…一言でいうなら、去年もそうであったし、おそらく来年もそうであるように、陽気で、とどこおりなかったのである(10:201)

僧正の生死が大きな時間の流れの中に影を落とすことはない。生身の人間としての僧正の死はあまりにも小さすぎ、役職として僧正は「死なない」存在である。一人の〈僧正〉の死はちょうど冬の終りが春を呼ぶように、ただ次の〈僧正〉に移り変わるのみにすぎない。〈僧正〉の連鎖は礼服の連鎖であり、個としての彼を必要としない。それは永遠のラビリンス、永遠の停滞である。僧正は自分の中に二つの要素を持つ。一つは礼服を脱いだ（＝裸で、弱々しい）ただの人間としての彼、もう一つは聖職であり礼服そのものであり儀式の精神的体现である僧正、無限の継続性の象徴としての彼である。「全ての人の顔が、老若男女の別なく同じように見え、霧に霞んで戸口が見えず、その中を群衆が絶えず動いている様子はい

つ果てるとも知れぬ人また人の群れを見る思いだった。」(10:186) 僧正の礼服を着た、生身の一人の人間としての体にとって、普遍的継続性の空虚さは堪え難いものになる。永遠の停滞のイメージに包まれた礼拝の後、帰宅途中の僧正の眼に美しい周辺の自然が映る。

月明かりに照らしだされた庭いっばいに、高価な重々しい鐘の、浮き浮きする美しい音色が響き渡った。白い壁、白い墓地の十字架、白樺、黒い物陰、それにちょうど僧院の真上にかかっている遠い月——そうした一切が今はふと、不可解な、しかし人間に身近な生活を営んでいるように思えた。(10:187)

僧正としての役目を演じるとき、永遠は堪え難いものに思われたのに対し、ここで自然の再生と継続が具現する時間の永遠は、彼の眼に調和と映り、喜びを与える。

人間存在もまた連続することによって時の流れに溶けこむ。この連続、連鎖のイメージは冒頭部分の僧正の涙が礼拝堂全体に静かに波のように伝播していく場面にも感じられる。同じ空間の共有の感覚は、さまざまな世代の時間の共有の感覚にも通じているはずである。時間はこのとき、限らない包容力に満ちている。

B. ナボコフは『谷間』について次のように評する。「この（『谷間』の）最後の章で、歯の抜けた老守衛という新しい人物を登場させたことはチェーホフのすばらしい才能の為せる業である。つまり、これは人間存在の連続性を暗示しているのだ。この部分が物語の結末であるとしても、物語は依然として同じ人物や新たな人物を交えて流れ続けるだろう。人生そのものが流れ続けるのと同じように。」⁸⁾

2.2 失われた「場所」を求めて

〈僧正〉の連鎖ではなくただの人間の列に加わることを彼は望む。母親が彼の許へ姪の8才の少女カーチャを連れてきた時、彼は昔母が同じように自分や自分の兄弟を連れて歩いていたのを思い出す。今その場所にはカーチャがいる。僧正の場所はない。彼は連鎖から外されている。彼は過去の記憶に耽りはじめる。それは失われた場所、母に対しての子の場所、連鎖のなかの場所を取り戻すことで

⁸⁾Navokov, Vladimir. *Lectures on Russian Literature*. Harcourt Brace Jovanovich Inc., 1981. (小笠原豊樹訳『ロシア文学講義』TBSブリタニカ, 1982年, 340頁)

あった。——裸足で帽子も被っていなかった、楽しい、美しい、忘れ難い少年時代！ その時の彼は弱々しい無防備な人間にすぎなかったのに。今では彼は礼服を纏い、母親でさえも彼を「僧正」として扱う。

彼は、ずっと昔、まだ子供だった頃に、母が今とそっくり同じ冗談混じりの恭しい口調で監督僧と話していたのを思い出した。(10:197)

母親は彼を、単なる「息子」と考えることはなかった。それはいつも「僧正」を纏っていたのだった。また同時に、「僧正」と「息子」が彼女の中で自然に結びつくこともなかった。彼の死後、周囲の者、そして彼女自身さえも疑ったのは「僧正になった息子」の記憶であって「息子」の記憶ではない。おそらくカーチャのことや、僧正の兄のことは忘れられることも、疑われることもないであろう。僧正がそれに気付き、母と訣別するこの時は同時に連鎖におけるもう一つの場所、即ちカーチャに対する母の場所の可能性にも気付いた時であった。カーチャは目に涙を浮かべて「叔父さん」に自分たちの家庭への援助を頼む。「彼も涙ぐんで、興奮のため長い間一言も口が開けなかった。」(10:197)しかしその約束は果たされない。彼の死は目前に迫る。

死ぬ前の晩、僧正はシソーイに語りかけるようにしながら独白する。「私は田舎の司祭か寺男に……それともただの平僧侶になればよかった。……こうしたことが全部わしをおしつぶすんだ……おしつぶすんだ……」(10:199)「僧正」は死の瞬間まで離れず、体を押しつぶす。翌朝の8時、この時から彼の人生の最後の時間が早送り画面のように進み始める。彼は腸チフスだったのだ。

腸出血のために、僧正は見る見る痩せて青ざめ、顔はしわだらけになり、眼は大きくなり、まるで急に年取ったように背まで縮んだ。彼はもう、自分が誰よりも痩せて弱く卑しくなったような、今までに起こった一切がどこか遠い遠い彼方へ去って、もう二度と繰り返されも続きもしないような気がしてきた。(10:200)

虚飾は急速に剥ぎ取られ、生身の彼の生はもう二度と「繰り返されも続きもしない」。彼は自分の弱々しさ、無力さを受け入れ、自分が去った後の〈僧正〉の連鎖とは切り離されて「当たり前」の素朴な人間に帰ったのだ。彼は死して連鎖に帰る。痩せて弱った彼を母親は初めて身近に感じ、「ああ、可愛いパブルーシャ。

私の息子！」と呼びながら接吻するが、もはや叙述の上で彼女は「母」ではなく「老婆」である。僧正は母をもう必要とはせず、二人は遠く隔たっているのだ。「いまや頭上には日光の満ちあふれる広い大空が広がる野原を」、ロシアの広大な空間を「どこへでも歩いていける。」彼は空間の無限に身を委ね、土に還る。ここでは空間の水平の無限がイメージされている。彼は天に昇るのではない。時間も、ロシアの大地も彼を包容する。

この作品で語られているのは「(無限かつ冷厳な)時間の中で揺れる(無力な)人間の弱さ、小ささ」というようなものだと考えられるが、ただし、その人間の弱さを否定し、あるいは責めるのではなくて、反対に時間の強さ、無限性を肯定し、それを希望のよすがにしているように感じられる。永遠＝無限に包まれること、それを感じ、一体感を抱くこと——それは一人の人間の無力を知ることでありその肯定である。この肯定は『谷間』で、なぜ、罪もない子供が苦しまねばならないのか、というリーパの問いに対しての、鳥には4枚でなく2枚の羽で十分のように人間もすべてを知る必要はない、という老人の言葉にも見ることができらるだろう。そこに「弱さ、小ささ」のイメージの鮮やかな逆転がある。

チェーホフは伝統的な19世紀のロシア作家たちとは異なり、人物から思想を剥ぎ取り、教訓も、真理を担う重荷も取り除く。取り除かれたそれらのものは一旦「もっと高いところ」に集められた上で均等に全ての上に降る。チェーホフの小説の中の真理は人物が担うのではなく彼らを(登場人物も登場してない人物も)含む世界の中に存在している。その世界は、それ自体には始まりも終りもなく、滅びることもない〈開かれた〉時間から成っているのだ。彼の短篇小説に描かれるさまざまな生はその中で連続する物語となる。

2.3 時間と空間の放浪者

『谷間』の老人は幼いわが子を失ったリーパになおも語り続ける。

『大丈夫……これから先いいことも悪いことも、いろんなことがある。母なるロシアは広いんだ。』(10:175)

この老人の力強い慰めはロシアの広さ、すなわち包容力の大きさに対する絶対的な信頼の上に成り立っている。この言葉「何しろ母なるロシアは広いんだ!」«А велика матушка Россия!»はもう一度後で繰り返される。「『私はロシアじゅう

を歩いて、ありとあらゆることを見てきたから、嘘はいわない。信用しなさい。これから先いいことも悪いこともあるさ。…（中略）…なあと、その後いいこともあったし、悪いこともあった。今だって死にたくはない。あと 20 年は生きたいな。つまりいいことの方が多かったということさ。』（10:175）

何百人もの人々のそれぞれの舞台への登場と退場を彼は見る。彼の過去の時間は非常に曖昧で、ほとんど彼は時間を越えて放浪しているかのようである。

『僧正』においてはシソーイが同様な放浪者である。彼は「放浪的な響き」のいびきをして眠り、これまで 11 人の僧正に仕えた。「シソーイは長く一所に腰を落ち着けていられぬ男で、この僧院にもう丸一年も暮らしたような気がしていた。…（中略）…自分が僧籍に入った頃のこととはとくに記憶が薄れていた。なにか生まれたときから僧侶になっていたような感じだった。」（10:199）

彼らがいつ生まれたか、そしていつ消えていくのかということも、いわば「遠い遠い霧の中」にある。彼らは、広漠なロシアの時間と空間の上にある動点である。彼らは観照者として人々の話を聞き、名もないが故に永遠の連鎖として生きる無数の幸福な人々の記憶を伝える。

シソーイは物語の始まる 3 週間前に僧院に立ち寄り、僧正は彼を「暇ができたとき話をするために」引き止めた。彼は僧正の死の前日「もうここにはおりたくない、明日発つ」と言いにくるが、「あんたとゆっくり話したかった」という僧正に対し、復活祭まではとどまることにする。僧正の死の後シソーイは僧院を去っていったであろう。——こうして、僧正の死と同時にシソーイは再び動きはじめる。

3 記憶と時間

記憶は『僧正』において時間との関わりの中で重要な役割を果たしている。僧正にとって過去の記憶は現実よりもいっそう身近なものであった。そもそも、「過去」とは何だろうか。普通我々が「過去」「未来」という時それは我々が立つ現在という時間の一点からの量的時間の距離の問題として意識されている。しかし、ここにもう一つの距離、つまり精神的距離の問題が入ってくるとき、我々の過去の定義は曖昧にならざるを得ない。E・シュタイガーは「抒情的なるもの」の時間の定義の際に、その過去は主体との間に本質的に距離がないとしている⁹⁾。ま

⁹Staiger, Emil. *Grundbegriffe der Poetik*. Atlantis Verlag, Zurich, 1946（高橋英夫訳『詩学の根本概念』法政大学出版局, 1969 年）を参照のこと。

たアンドレイ・タルコフスキーも「各人にとって現在という刻々と変化する瞬間の、過ぎ去ることのないリアリティーが、まさに過去のなかに蓄えられていくとするならば、過去はある意味で現在よりも遥かにリアルである」と述べている¹⁰⁾。チェーホフにおいても、過去は現在に入りこみつつ現在を創造する。

時計は永久に周回運動を繰り返しながらもある一点で明確に「今日」と「昨日」を区別する。しかし強迫的な時計による現実の時間呪縛にもかかわらず、僧正は自由に記憶によって過去を現前する。記憶は量的時間の果てしない距離をやすやすと飛び越える。チェーホフの作品にしばしば「時間の境界を定めがたい人々」が登場するのは、記憶の力を借りてのことなのである。

『学生 *Студент*』(1894)は、主人公の神学生イワンが、聖金曜日に、何も食べていないのでひとしお身にこたえる寒さの中、遠い焚火の明かりを目にして、それを頼りにペシミスティックな物思いに沈みながら歩いていく場面から始まる。「リューリクの時も、イワン雷帝の時も、ピョートルの時も、まさにこのような風が吹いていたのだ。彼らの時代にも、同じような破れた藁屋根、無知、憂愁、同じような周囲の物寂しさ、闇、圧迫感があったのだろう。こういう恐ろしいものは過去にあってだけでなく、これからもあるだろうし、千年経っても生活はよくならないだろう。」(8:306)

焚火の所へ来て彼は火に手をかざす。寡婦の母親と娘も一緒に手をかざしている。辺りは夕闇である。この象徴的な〈闇と焚火〉が、彼にペテロの「三度の否定」を思い起させる。キリストがユダの裏切りによって捕えられた後、ペテロは中庭の焚火を囲んで人々と一緒に座った。するとある女中が火の傍のペテロを見て、『この人もイエスと一緒にいた』と言う。ペテロは三度否定する。そのとたん鶏が鳴き、ペテロは『今日、鶏が鳴くまでに三度私を知らないというであろう』というキリストの言葉を思い出して激しく泣き出す。「今、ぼくがこうして立っているように、ペテロも焚火のそばに立っていたのだ。」(8:308)彼は話すうち、その情景が見え、すすり泣く声が聞こえるような気がしてくる。それまで微笑を浮かべていた娘が突然大粒の涙を流す。彼はまもなく別れを告げて再び闇の中に立ち去る。しかしこのささやかな出来事は彼に大きな影響を与える。二千年前の人間の言動が今彼女の涙を誘ったのだ。「もしワシリーサが泣いたのなら、つまり、あの恐ろしい夜にペテロにおこった全ては、彼女にも関係があるのだ……」(8:308)そ

¹⁰『映像のポエジア——刻印された時間』アンドレイ・タルコフスキー、鴻英良訳 キネマ旬報社、1988年、84頁（ロシア語原典：Запечатленное время は未刊）

して彼は次のような結論を得る。「過去は次々に起こる出来事の連鎖をなし、現在そして未来に結びつく。」(8:309) それは正に、過去と未来を孕んだ神聖な瞬間であった。

過去は「記憶」として常に蘇る準備をしている。彼に蘇ったのは個人の記憶でなく全人类的記憶であるが、その記憶は感情の新鮮さ、一体感においてもはや過去の出来事ではなくいわば限りなく幅が広がり、豊かになった現在である。学生イワンにとっても、僧正ピョートルにとっても、過去は後方にどんどん飛び去り見えなくなっていくものではなく、現在のなかに蘇り、未来に投影されていくのである。

このように「記憶」は開かれた時間、時間連鎖の扉であり、また源泉でもある。「記憶」による時間感覚を持つとき、人々は時計の支配、呪縛から抜け出る。——彼らは限りある個の生を生きながら同時に個の連続である永遠の時間にも生きるのである。

チェーホフの人物たちはそのほとんどが、ナボコフの言葉を借りるなら「無力だからこそ魅力的な人々」といえるであろう。しかし彼らが無力なのは社会に対してではなく、むしろ鮮やかなまま夢を保ち続けることを拒む、時間に対してである。過去の中だけに停滞して生きるのならば人は夢を見ていられる。しかし現実にはこの時期はロシア史の中でも最も急速に時が流れていた時代であるといえるであろう。その中で彼らに与えられた解決とは、時間と共に生き、時間の中に個の場所を得るというものであった。あたかも連続する印象を与えるチェーホフ芸術の世界、小さな短編に登場し退場する無数の人々——名も残さず死に、忘れ去られていく存在である彼らは皆、ロシアの無限の連鎖に連なる人々である。彼ら一人一人が永遠と個の均衡の中に生きているのである。

表 1. 時間表現一覧

(番号はテキスト出現順、ページ数はテキストでの出現ページを示す)

стр.		時間に関わる表現
186	1	柳の日曜日を明日に控えて、…
	2	柳の小枝が配られはじめた時はもう <u>10 時</u> になろうとして、…
	3	もう今夜で <u>3 日</u> も気分がすぐれぬ僧正ピョートルには、…
	4	もう <u>丸 9 年</u> 会わなかった実の母親である、マリヤ・チモフェーエ ヴナが…
	5	ものの <u>5 分</u> もすると、修道僧の合唱が始まって…
187	6	折から <u>4 月</u> もはじめのこととて…
188	7	「今は何時か?」「 <u>11 時</u> になったところでございます。」(僧正と 侍僧の会話)
	8	僧院の時計が <u>15 分</u> を打った。
	9	以前、彼女は… <u>17 才</u> から <u>60 才</u> まで長い間暮らしていた。(僧正の 母についての回想部分)
189	10	パヴルーシャは少なくとも <u>15 才</u> までは発育の遅い子で、…(自身 についての回想部分)
	11	<u>3 日前</u> にこのパンクラチエフスキー僧院に立ち寄ったのを…
190	12	<u>1 時半</u> に朝の勤行の鐘が鳴った。
	13	明くる日の <u>柳の日曜日</u> には、…
	14	<u>1 時</u> すぎには、珍客の年老いた母と 8 つになる姪のカーチャが食 事に來た。
	15	「 <u>丸 9 年</u> 会いませんでしたわね。」(僧正の母と僧正の会話)
191	16	「婿のイワン神父が… <u>聖母昇天祭の 3 日前</u> に亡くなりました。」(僧 正の母と僧正の会話)
192	17	(富裕な二人の夫人が来て) <u>1 時間半</u> ほど緊張した顔つきで座っ ていった。
	18	夕べの勤行の鐘が鳴り、…一日が過ぎていった。
	19	<u>3 年間</u> 、彼は神学校でギリシャ語を教えた。(自身についての回想 部分)
	20	<u>32 才の時</u> 、彼は神学校長に任命され、…(自身についての回想部 分)

(次頁に続く)

表 1. 時間表現一覧(続き)

стр.		時間に関わる表現
193	21	やがて <u>8年</u> の歳月が流れて、…（自身についての回想部分）
	22	「まだ早いじゃないですか。 <u>10時</u> 、いやもっと前ですよ。」（僧正とシソーイの会話）
194	23	管区僧正は… <u>一月</u> も床についたきりであった。
195	24	<u>火曜日</u> の勤行の後で、…
	25	エラーキンは <u>1時間</u> ほど腰を据えて、…
	26	夕べの勤行の鐘が鳴り、礼拝堂へ行かねばならなかった。
196	27	<u>木曜日</u> には彼は会堂で朝の勤行をつとめ、…
198	28	（僧正は） <u>2度時計の打つ音</u> と、…を聞いた。
	29	母が入ってきて <u>1分</u> ほどおずおずと彼の顔を眺めていた。
	30	「何時だね?」「 <u>7時15分</u> でございます。」（僧正と侍僧の会話）
	31	勤行が終わったのは <u>12時15分</u> 前だった。
199	32	（シソーイは）もう <u>丸1年</u> も暮らしたような気がしていた。
	33	明くる朝の <u>8時</u> ごろ、腸出血が始まった。
200	34	明くる <u>土曜日</u> の明け方、…
201	35	明くる日は <u>復活祭</u> だった。
	36	<u>一月</u> たつと、新しい僧正が任命され…